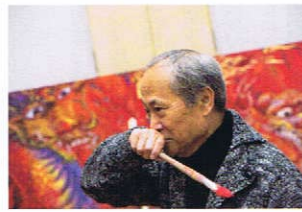




絹谷幸二



「絵は絵描きの夢や希望、苦悩や迷走、あるいは宿命までも映し出す鏡だ」と。



都内有数の高級住宅街、住居のワンフロアにアトリエを構える。人なつこさと眼光の鋭さを兼ね備えている画家。琳派の絵師たちが時代を超えて引き継ぐ画題「風神雷神」を描く。

アート クローズアップ

～文化功労者顕彰記念～

絹谷幸二展

4月8日(水)～14日(火) →P103 参照



堂々と現れる仏像、富士山。「風神雷神」は150号キャンバス2枚に描かれ、大迫力である。



絹谷幸二(きぬたに・こうじ) / 1943年、奈良県生まれ。文化功労者、日本藝術院会員、独立美術協会会員。東京藝術大学名誉教授、大阪芸術大学教授。

art close up

PHOTOGRAPHS KENTA AMINAKA (SESSION) TEXT YOSHIO SUZUKI

極彩色の絵具が躍り、金やブラチナ箔が目飛び込みます。日本人が敬うもの、愛するものを威厳ある構図で描き、また、画家自身が奈良に生まれ、イタリアに学んだヒストリーを絵に込めることも。

この画家が先史時代に生まれていたら、洞窟の壁に絵を描く人だったかもしれません。ラスコーやアルタミラに残っている絵のような。あるいは、もしもイタリアのルネサンス期に活動していたら、教会の壁や天井に大きな絵を描き、人々を癒やし、救っていたことでしょうか。画家・絹谷幸二さんの仕事を見ていくと容易にそんな想像がわきあがってきます。

んのアトリエを訪ねました。イタリア、富士山、花などのモチーフが用意されています。若き日にイタリアに渡り、ヨーロッパの近現代美術に触れ、ルネサンス期の古典を積極的に学んだことが彼の根幹を成しています。

一方、彼は古都・奈良その中心である興福寺近隣に生まれ育ちました。近年の大きな画題に仏教や仏像があるのも無縁ではないでしょう。「最近のテーマに『不二法門』があります。ふたつの相反する概念はそれぞれ別々ではなく、ひとつ

つものものの部分であるという考え方で初期大乘仏典『維摩経』の教えです。生と死、善と不善、我と無我、苦と楽、戦争と平和。それらは対立するものではなく、ひとつのものの部分であるということに絵によって検証していきたい」

光満ち、色彩溢れる世界はわれわれの生命が生きていること生かされていることが祝福される場所だと絵を通して謳い上げます。色彩のない場所には生命の危機が迫ります。たとえば、砂漠、深海、戦争、貧困という死が忍び寄る場所には鮮やかな色彩がありません。宗教よりも大らかに、人生よりも長く、世界よりも広く壮大な視点をもって描き、見る者に喜びを与えてくれる。これも絵が持っている大きな力なのです。